

梅枝

世阿弥作

季は	地は	後	前
秋	摂津	ワキ 前に同じ	ワキ 身延山の僧
		ワキヅレ 伴僧	シテ 宿主の女
		シテ 富士の妻	

「捨てゝもめぐる世の中は。 く。 心の隔てなりけ
り。

詞 「是は甲斐の国身延山より出でたる沙門にて候。我
縁の衆生を濟度せんと。多年の望みにて候ふ程に。
此度思ひ立ち廻国に趣き候。

道行

「何処にも。住みは果つべき雲水の。 く。 身は果

知らぬ旅の空。月日程なく移り来て。所を問へば
世を厭ふ。我衣手や住の江の。里にも早く着きに

けり。 く。

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早津の国住吉に着きて候。あ
ら笑止や。俄に村雨の降り候。是なる菴に宿を借
らばやと思ひ候。如何に此屋の内へ案内申し候。

シテ
「實にや松風草壁の宿に通ふといへども。正木の葛
来る人もなく。心も澄める折節に。事問ふ人は誰
やらん。

「是は無縁の沙門にて候。一夜の宿を御借し候へ。

シテ詞

「実に／＼出家の御事。一宿は利益なるべけれども。さながら傾く軒の草。埴生の小家のいぶせくて。何と御身を置かるべき。

ワキ 「よしく／＼内はいぶせくとも。降りくる雨に立ち寄る方なし。唯さりとては借し給へ。

シテ 「実にや雨降り日も呉竹の。一夜を明かさせ給へとて。

下歌地

「早此方へと夕露の。葎の宿はうれたくとも。袖を

かたしきて。御泊りあれや旅人。

上歌

「西北に雲起りて。／＼。東南に来る雨の足。早くも吹き晴れて。月にならん嬉しや。所は住吉の。松吹く風も心して。旅人の夢を覚ますなよ。／＼。」

ワキ詞

「如何に主に申すべき事の候。

シテ詞

「何事にて候ふぞ。

ワキ

「是に飾りたる太鼓。同じく舞の衣裳の候ふ不審に

こそ候へ。

シテ

「実によく御不審候ふ物かな。是は人の形見にて候。

是に付きあはれなる物語の候ふ語つて聞かせ申し候ふべし。

ワキ 「さらば御物語り候へ。

シテ

「昔し当国天王寺に。浅間といひし伶人あり。同じく此住吉にも富士と申す伶人有りしが。其頃内裏に管絃の役を争ひ。互に都に上りしに。富士此役を賜はるによつて。浅間安からずと思ひ。富士を

あやまつて討たせぬ。其後富士が妻夫の別れを悲しみ。常は太鼓を打つて慰み候ひしが。それも終に空しくなりて候。逆縁ながら弔ひて給り候へ。

ワキ 「かやうに委しく承り候ふは。其古への富士が妻のゆかりの人にてましますか。

シテ

「いやとよそれは遙かの古へ。思ふも遠き世語の。ゆかりといふ事あるべからず。

ワキ

「さらば何とて此物語。深き思ひの色に出でゝ。涙

シテ
「なふ何れも女は思ひ深し。殊に恋慕の涙に沈むを。
などかあはれと御覧せざらん。

ワキ
「猶も不審は残るなり。形見の太鼓形見の衣。こゝ
には残し給ふらん。
シテ
「主は昔になり行けども。太鼓は朽ちず苔むして。
ワキ
「鳥驚かぬ。
シテ
「此御代に。」

地
「住むもかひなき池水の。く。忘れて年を経し物
を。又立ち帰る執心を。助け給へといひ捨てゝ。
かき消す如くに失せにけり。〔申入〕

ワキ
「それ仏法さまぐなりと申せども。法華は是れ最
第一。」

ツレ
「三世の諸仏の出世の本懐。衆生成仏の直道なり。
ワキ
「中んづく女人成仏疑ひあるべからず。」

二人
「一者不得作梵天王。二者帝釈三者魔王。四者転輪

聖王。五者仏身云何女身。

地

「速得成仏。何疑ひか荒磯海の。深き執心を。晴らして浮び給へや。或ひは若有聞法者。く。無一不成仏と説き。一度此経を聞く人。成仏せずといふ事なし。唯頼め頼もしや。弔ふ灯の影よりも。化したる人の來りたり。夢か現か。見たりともなき姿かな。

ワキ

「不思議やな見れば女性の姿なるが。舞の衣裳を着

し。さながら夫の姿なり。

詞

「さては有りつる富士が妻の。其幽靈にてましますか。

シテ

「實にや碧玉の寒き蘆。錐囊に脱すとは。今身の上に知られさぶらふぞや。さりながら妙なる法の受持に逢はゞ。变成男子の姿とは。などや御覽じ給はぬぞ。然らば御弔ひの力にて。

地

「憂かりし身の昔を。懺悔に語り申さん。さるにて

も我ながら。よしなき恋路に侵されて。長く悪趣に墮しけるよ。さればにや。女心の乱髪。ゆひかひなくも恋衣の。妻の形見を戴き。此狩衣を着しつゝ。常には打ちし此太鼓の。寐もせず起きもせず。涙敷妙の枕上に。残る執心を晴らしつゝ。仏所に至るべし。うれしの今の教へや。

シテ「思ひ出でたる一念の。

地「起るは病ふとなりつゝ。繼がざるは是薬なりと。

古人の教へなれば。思はじく。恋忘草も住吉の。岸に生ふてふ花なれば。手折りやせまし我心。契り麻衣の片思ひ。執心を助け給へや。

「實に面白や同じくは。懺悔の舞をかなでゝ。愛着の心を捨て給へ。

シテ「いざくさらば妾執の。雲霧を払ふ夜の。月も半なり。夜半樂をかなでん。

地「心も共に住吉の。松のひまより詠むれば。

シテ「波もて結へる淡路潟。

地「沖も静かに青海の。」

シテ「青海波の波返し。」

地「かへすや袖の折を得て。軒端の梅に鶯の。」

シテ「来鳴くや花の越殿樂。」

地「うたへやうたへ。」

シテ「梅が枝。」

地「梅が枝にこそ。鶯は巢をくへ。風吹かば如何にせ

ん。花に宿る鶯。 (樂)

シテ「面白や鶯の。」

地「面白や鶯の。声に誘引せられて。花の陰に來りたり。我も御法に引き誘はれて。く。今目前に立ち舞ふ舞の袖。是こそ女の夫を恋ふる。想夫恋の樂の鼓。現なの我有様やな。」

シテ「思へば古へを。」

地「思へば古へを。語るは猶も執心ぞと。申せば月も

入り。音楽の音は松風にたぐへて。有りし姿は明
けぐれに。面影ばかりや残るらん。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「譜曲評釈第四輯」大和田建樹著